継往開来

―継承・発展 未来を切り開く―

地域に必要な企業（ひのよしさん）であり続けたい

岐阜市北鶉にて、給排水設備、空調設備、上下水道工事、宅地造成工事など生活インフラ整備を中心に事業を手掛ける日野吉工業株式会社。今回は四代目の川島弘吉さんにお話をお伺いしました。

日野吉工業株式会社 代表取締役 **川島 弘吉（ひろよし）さん**

今、地域に必要なことは

創業は大正六年。初代の川島吉太郎（きちたろう）さんは、生まれ育った岐阜市日野、そして自身の名から吉をとり「日野吉商店」として、岐阜市長住町で建設用機械器具の製造販売をはじめました。当時、日本の多くの地域では、まだ上下水道設備が整っておらず、井戸から直接地下水を汲み上げる「手押しポンプ」を使用している家庭がほとんどでした。吉太郎さんは、製造販売の仕事を通して「今、必要とされているのは飲み水の確保と排水処理。これからは生活水の整備が急務になってくる」と強く感じるようになりました。

「この街の地域の発展のために役に立ちたい」

吉太郎さんの想いは高まり、昭和二十三年、水道の給排水設備施工業に着手しました。以来、岐阜県下を中心に給排水設備、空調設備、上下水道工事等、地域に必要な事業に携わり、１００年余の歴史を歩んできました。

「人の縁」を大切に

弘吉さんは現在四十七歳。岐阜市長住町に会社があった当時、生まれた時から住まいと会社が一緒の場所だったことから、たくさんの職人・従業員の方々に囲まれた環境で育ちました。そのなかで自然と家業を継ぐことは当たり前と考え、工業高校卒業後は愛知県で家業に関連のある会社で修行し、二十四歳の時に日野吉工業へ入社。現場や営業を経験し、経営に携わるようになっていきました。そして、満を持して本年四月、四代目に就任しました。

弘吉さんが、これまで先代、先々代から学んだことを、こう振り返ります。

「二代目の祖父は、まず祖父が箸に手を付けないと家族が食事を始められないほど大変厳しい人でした。逆に三代目の父は、おおらかで遠くから見守るタイプでしたが『目の前の小さなことを疎かにしてはいけない』と私や社員に常々話していました。我々の仕事は繰り返しの手順や作業が主ですが、同じ環境下、現場は二度となく生きものです。安全に安心という気持ちはお客様だけでなく、社員に対しても同じ気持ちです。それを父からしっかりと教えられました」

日野吉工業では、代々「縁」をとても大切にしてきました。

弘吉さんが入社した頃、建設業界は低迷期でした。大事に育て上げても、家業へ戻ってしまうことから同業他社の子弟の受け入れをしないという考えの企業も多かった中、先代の吉博さんは幾人も快く受け入れ、しっかりと技術と経験を伝え送り出していました。その場の損得ではなく、人の縁、常に一緒に仕事する仲間や協力者や社員を大切にすることを何より大事にしてきた吉博さんの人柄そのものでした。その心は当然弘吉さんにも引き継がれました。

「今でも、父が縁をつないでくれた人たちが、忙しい時や困った時に私を助けてくれます。『人の縁』という素晴らしい財産を、父から受け継ぎました」

日野吉工業株式会社
所在地 岐阜市北鶉3-21
ＴＥＬ 058-272-0721
ＦＡＸ 058-272-7271

次世代へ繋ぐもの

そんな弘吉さんが今、一番懸念していることがあります。それは、技術の進歩により、これまであたりまえに身につけてきた基本的な経験や知識を学ぶ機会が格段に減ってしまったことです。

「例えば、現在の配管には伸縮性があり耐震性の強い水道管が使用されています。軽い素材で出来ており、はめるだけで繋げやすくコスト的にも進化しました。昔は鉄の配管で、職人が配管の長さや太さに合わせて切るなど調整し繋げ合わせるねじ（継手）を使用していました。今の若い人たちは昔の配管の作業を実際にやったことがないので、出来ない人が多いと思います。しかし建物に使用している配管は新しい物ばかりではないので、あらゆる配管に対応する必要があります。その上、昔の配管を扱える職人はどんどんリタイアしていく年代です。その技術をどう引き継いでいくのかが大きな課題だと思っています」

その危機感から、日野吉工業の新入社員は昔の配管を使った作業をあえて体験するという研修を重ねています。

「知らなくて出来ないのと、出来なくても知っているのでは大きく違います。あえてアナログな体験をすることで、経験と知識を自分のものにしてほしいのです」

また昨今、自然災害が多くなったことも懸念しています。各地で甚大な被害が発生するなかで、日野吉工業は設備の普及だけでなく、災害時に迅速に対応できるよう、同業社で作る共同組合と県や市と災害協定を結んでいます。

「阪神淡路大震災の時には日野吉工業の社員も現地に行きインフラ整備に力を注ぎました。普段から、社員は何人派遣できるか、重機は何台出せるか、各会社が把握して災害訓練をしています」

さらに人材不足にも懸念し、近年女性活躍に力を注ぐ建設業界のなかで、日野吉工業ではいち早く率先して取り組んできました。そのおかげで女性の技術員も増え主力ともなり、もちろん現場にも出ています。

「女性活躍のみならず、男女の垣根を超えて働けるよう、早くから環境を整えてきました。これからも若い人たちには、失敗を恐れずどんどんチャレンジして自分のオリジナルを構築してほしいですし、またそんな環境を用意できる会社であり続けたいと思っています」

愛称「ひのよしさん」

創業以来、日野吉工業では跡を継ぐ長男にはみんな「吉」の漢字がつけられてきました。

「初代の吉太郎、二代目の吉之助（きちのすけ）と続き会社の登記は『ひのきちこうぎょう』と読みます。三代目の父、吉博（よしひろ）が社長に就任した際に、お客さんをはじめ周りの皆が親しみを込めて『ひのよしさん』と呼んだことから『ひのよしこうぎょう』と名乗るようになりました」

弘吉さんは、生業を誇りに思い、これからもこの地域に必要とされる企業であり続けたいと強く願っています。その上で、社員や仕事仲間を信じることで「どんな苦難でも乗り越えられる」と話します。

そしていつか、自分の想いを継いでくれるであろう、息子へこう託します。

「自分の周りで意見を言ってくれる人を『大切』に、何でも相談できる仲間を『大切』に。そして、この仕事を『大切』にしてほしい」

日野吉工業の歴史は、これからも地域のあたり前の日常の安心・安全とともに、築かれていきます。